

テストが終わって半ドンで帰ることができた。

テスト終わりの解放感に浮かれる周りからは遊びに誘われたけど、すべてを断ってまっすぐ帰宅をした。

従弟の小学校が終わるまでは時間があつたとはいえ、テストの期間中ご無沙汰だったから、逸る思いが抑えられなかったのだ。

なんでご無沙汰にしていたかって？そりゃあ一度、従弟を触りだしたら、きりがないからだ。

まだ小学生だから一回しか達することはできないけど、触りだしたら達するまで、全身くまなく足の裏まで、指と舌を滑らせるのに夢中になつてしまふ。

まだ男として体ができあがつていなく、それでいて女子とも微妙に違う肌の感触を堪能したいのもありつつ、従弟が頬を染め泣き、涎を垂らして喘ぐのをずっと見ていたい。

思春期に差しかかるか、ないか微妙な時期の危うい感じがするからか。従弟が特殊なのか。

とにかく反応がエロい。

なんて、考えているうちに、もよおしそうになったのを家まで必要もなく走って、やり過ごした。

帰宅をすると母親がいなかったので、気が抜けてソファに倒れこんだ。見つかったら「ちよと！そんなところで寝ないでよ！」と怒られるのは目に見えてたとはいえ、目覚まし代わりになるだろうと思つて。

意外に母親の帰宅は早く、もう少しで寝入りそうになるところで「もお、姉さんたら！」と荒々しく鍵を開ける音が耳を打った。

ソファにうつ伏せになっていた体を仰向けにして見やれば、すこしして扉が開かれ、従弟が姿を現した。

母の言葉からして、その出現は予想できていたものの「よ」お、と言おうとして声を詰まらせる。

従弟は体操服を着てランドセルをしよっていた。

自分もかつて着ていた体操服とはいえ、こんなにぴちぴちして短かったらどうかと、半ズボンに目を見張ってしまふ。

従弟の小学校は自由服だから、小学生感がある格好を目にするのが新鮮だったせいもあるけど、俺の視線に邪念を感じとったのか。

従弟は耳を赤くして俯き、内股になって柔らかそうな太ももを擦らせた。

ぐ、と喉仏を力ませた。あつという間に、あらゆる妄想が頭の中に広がって、うっかり涎を垂らしそうになったのを堪えたのだけど「どうしたの入らないで」と母親が姿を見せくれたおかげで、とたんに萎える。

「あら、あんた帰っていたの」と従弟の背を押しながら入ってきた母親に「なにがあつたの」と聞けば「それがもー！聞いてよ！」ときんきん声で言われた。

「小学校から、姉さんと連絡がとれないからって、こっちに電話がかかってきたのよ。」

で、先生が言うには体育のときに騒ぎがあつたんだってさ。

どつかの悪ガキがこの子のシャツをめくって、赤いデキモノがいっぱいあつて気持ち悪いって、ぎやあぎやあ喚いたって。

まあ、そんだけ喚いたくらいだから、私も見たけどもう、かわいそうなくらい。

病院で診てもらったら、ちゃんと治るって言われたけどね」

声高で早口な話しぶりに途中で飽きて、また従弟の半ズボンを注視していた。

「ね、この子、かわいそうでしょ？」と言われて「そうだな」と生返事をしつつ「あれじゃあ。パンツが見えるんじゃない？」「なんならあれも見えるんじゃない？」とろくなことを考えていなかった。

とはいっても「にしたって、姉さんはこんなときに何やってんだか！」と怒りをぶり返した母の傍らで、縮こまっている従弟が見ていられなく、口を挟もうとした。

が、「ああそうだ」と気分屋だから、あっさりと怒りを手放し「これ」と袋を俺に投げつけた。

腹に乗った袋の中を見ると、処方箋の紙袋とボディークリームの容器が

入っていた。

袋に手を突っこんで中身を取りだそうとするうちにも「私はお昼ご飯作るから」と母親は歩きだして「薬は塗ってもらったてきたから、保湿クリームを塗ってあげて」と言い残して、台所に引っこんだ。

取りだした保湿クリームを見つめ、台所から聞こえる独り言と物音にしばらく耳を傾けてから、顔を上げた。

そして、相変わらず内股で股間を隠すように体操服の裾を引っ張っている従弟に、保湿クリームを掲げてみせて、笑いかけた。

「二階に行っか」